

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520271

研究課題名(和文)歌仙絵の資料調査とその成立及び流布に関する総合的研究

研究課題名(英文)Comprehensive Study on the Origins, Development and Spread of Kasen-e (Portraits of Poet Immortals) through Material Investigation

研究代表者

寺島 恒世 (TERASHIMA, TSUNEYO)

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：80143080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：鎌倉時代以降、多様に展開する「三十六歌仙絵」は、有名な佐竹本の系譜ではなく、業兼本(なりかねほん)の系譜が主流を形成する。それは業兼本が「時代不同歌合絵(じだいふどう-うたあわせ-え)」の影響を受け、歌合絵としての属性を継承し、創造性を発揮したからである。例えば、「左書き」という元来日本語にはない表記が生まれるのも、歌合として左と右を対向させる強い志向に発するものであった。

歌仙絵の展開を究明するためには、歌合絵との関係を鮮明にすることが必須となる。また、それが未だに実態が明らかではない「百人一首絵」の成立の謎を解く鍵となるはずである。

研究成果の概要(英文)：Among various versions of Sanju rokkasen-e (Portraits of thirty-six poet immortals) painted since Kamakura era, Narikane-bon and related versions constitute the mainstream, not well-known Satake-bon and related ones. Under the influence of Jidai hudou utaawase-e (Illustrated poetry match of differing ages), Narikane-bon respects its nature of Utaawase-e (Illustrated poetry match) and shows creativity as such. It presents the first case of Hidarigaki (arrangement of poems where the lines are read from left to right against traditional Japanese writing system), for example, with the strong intention to arrange Hidari (the Left team) opposite to Migi (the Right) on the screen as in the actual poetry match. Investigation of the development of Kasen-e requires the clarification of its relationship with Utaawase-e, which should eventually elucidate the unrevealed circumstances around the origins of Hyakunin issyu-e (Illustration of One Hundred Poems by One Hundred Poets).

研究分野：和歌文学

キーワード：歌仙絵 業兼本三十六歌仙絵 俊忠本三十六歌仙絵 歌合絵 時代不同歌合絵 百人一首絵

1. 研究開始当初の背景

鎌倉時代初期に成立する「三十六歌仙絵」という作品は、和歌と絵画及び書の融合した新たなスタイルの総合芸術である。平安時代後期に始まる「人麿影供」という新たな催しと、『三十人撰』・『三十六人撰』という新たな秀歌撰の影響を受けて誕生した「歌仙絵」は、その嚆矢となる佐竹本以下、時代とともに数多くの作品が生み出されてきた。その諸本については、各個に検討がなされてきたものの、系統を異にする流れが成立する理由は未だ定かではなく、そもそもそのジャンルの誕生に関しても、なお解明すべき事ながら少なくない。その理由に深く関わる「時代不同歌合絵」との関係についても研究は緒に就いたばかりである。なお、『時代不同歌合』には『百人一首』との関わりが想定され、その『百人一首』に絵が伴っていたか否かには定説がない。多種多彩な歌仙絵の展開には、歌合絵との相関を踏まえた根本的属性の検証が急務である。

2. 研究の目的

鎌倉時代初期に生み出され、中世・近世に広く流布する歌仙絵につき、その成立と流布の様相を解明することを目的とする。従来、一通りの解明はなされながら、成立にせよ、多様な展開を見せる流布にせよ、その必然性に関する検討は十全ではない。本研究では、最も早い時期の成立とされる「佐竹本三十六歌仙絵」の成立につき、その性格と資料の再検討を通して見極めるとともに、系統を異にする業兼本三十六歌仙絵との差異を詳細に解明することから、三十六歌仙絵の隆盛な展開の要因を解明する。その際、一方で隆盛に流布する「時代不同歌合絵」の関わりを捉え直すことから、諸本が異なる系統に分かれる要因を探るとともに、一方の系譜が後代への展開を豊かになす理由を追及し、その系譜の上に立つ特異な性格の諸作品を分析する。なお、『時代不同歌合』の改作の問題、及び「時代不同歌合絵」と「百人一首絵」の相関の問題にも触れ、歌仙絵作品が目指そうとしたもの

を総合的に究明したい。

3. 研究の方法

「三十六歌仙絵」と「時代不同歌合絵」につき現存資料の調査を行い、まず、可能な限りその画像資料を収集する。前者は佐竹本・業兼本以下数系統の諸本に分類され、後者はA～F本に分類される。前者においては森暢氏の集成（『歌合絵の研究 - 歌仙絵 - 』1970年、角川書店）があり、後者においては樋口芳麻呂氏の集成（『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』1983年、ひたく書房）があるが、その後に見出され、紹介された善本を含め、この2作品においては、現在知られている資料を検討の対象とする。その収集資料を詳細に分析することを通して、「三十六歌仙絵」と「時代不同歌合絵」の関係を含む成立過程の考察を行い、歌仙絵の成立の経緯とその必然性を明らかにする。特に先行説で理解が分かっている課題につき、新たな資料の分析を行い、従来の把握に対する詳細な検証を加え、それを論拠にして、解決を図ることを期している。さらに、「時代不同歌合絵」の検討を通し、初撰本から再撰本への改編の理由を新たに考察し、その図像の特質から実態が定かでない「百人一首絵」との関係につき、成立の見通しを得る。

4. 研究成果

(1) 「三十六歌仙絵」における佐竹本系統本と業兼本系統本

三十六歌仙絵の諸本は、その特徴から佐竹本系統と業兼本系統に分かれる。本研究では、まずその派生につき、成立に由来する性格の差異が異なる継承をもたらし、異なる系統をなす理由となることを導いた。佐竹本は、平安時代の『三十人撰』『三十六人撰』を成立の契機としており、伊藤敏子氏は、その原作を番いの二歌人が左右から向き合う形を取ると想定した。しかし、その復原説には例外が少なからず含まれ、左右相對の形式が想定されていたとは考え難い。和歌の書式の統一と、当時の「公家列影図」等からすれば、番いをなす2歌人が上下

に配されていた可能性さえ指摘される。正装の歌仙像の描出と、秀歌抜粋から、本作の企図は、各歌仙個々の歌と姿を残すことにあり、歌人を番え、対向させる狙いは乏しかったと見るのが穏当である。

対して、業兼本は明らかに番いを意識する。それは、図像が前半（左方）は右向き、後半（右方）は左向き統一され、歌の位置が前半（左方）は図像の後、後半（右方）は図像の前に置く書式から証明される。それは歌合形式に等しく、先行研究が説く「時代不同歌合絵」との相関は明らかである。ただし、相関は、業兼本から「時代不同歌合絵」への方向を説く森暢説とその逆を説く真保亨説が対立し、解決はなされていない。

当該課題につき、調査資料の分析に基づき、「時代不同歌合絵」が先行し、業兼本がそれに倣う形で図像を踏襲したことを立証し、左右の対向を鮮明化するための業兼本の独創であることを導いた。その典拠となる「時代不同歌合絵」は鎌倉時代の原形を窺わせる善本によれば、リアリティを追求したものである（例えば六条家歌人の図像等）。書式と絵の踏襲は、実は二人を番える歌合絵としての基本属性の踏襲であり、二巻構成として、前半に左方、後半に右方と、集団で向き合い、競詠する歌合らしさを示すのである。業兼本の形式が受け継がれ、歌仙絵巻の濫觴となるのは、この歌合絵の属性が作品を創造し続ける源となるからであったと判断される。

（2）業兼本の系譜の特質 左書きの系譜の由来

業兼本ののち、歌合の番いへの志向をさらに強めた注目すべき本文が登場してくる。俊忠本三十六歌仙絵である。これは対面する歌合の形式を取り、その左方に属する歌人は、作者名を左、歌を右、右方歌人は作者名を右、歌を左に記し、しかも左方の歌を左書きにして、右方の右書きとの対称性を強く示す形である。日本語の表記において通常存しない左

書きが試みられた理由は、中国の対幅書画との類似性等では説明されず、対向形式で向かい合う人物から発せられた声をその順に再現する試みと考えることが可能である。絵とともに書を鑑賞する者に、歌が生まれる場に歌人相互に詠み合う営みが存したことを、リアルに想像させる日本語表記の特異例と認められる。声の機能が重視され、画中詞が登場する時代に表記として現れたこの特異例が、世尊寺流の書式として定着していく左書きの淵源となるのである。

左書きは、中世の歌仙扁額の表記にも現れ、享徳四年（1455）奉納の和爾賀波神社（香川県三木町）蔵本に認められる。扁額の場合は、神殿に向かう拝殿に左右に配される奉掲形式であり、拝殿壁面に並ぶ歌仙の先は、左方・右方ともに神であることから、詠まれた声が神に向かうことを示すと考えることができる。中世の扁額の小鴨神社本、常陸総社神社本、愛宕神社（鹿児島県出水市）旧蔵本、大生郷天満宮（茨城県常総市）蔵本等が右書き色紙形であるのに対し、直接余白に記す和爾賀波神社本の左書きは、自在に書を可能にする色紙形以前の書式であったことも理由となるであろう。

近世に多様化する一方、世尊寺家代々伝書で整理される書式の中に、確かに継承される左書きは、淵源を辿れば業兼本の新たな試みに発していたのである。

（3）歌仙絵の狙い 藤房本の個性から

時代の進行とともに多様化する三十六歌仙絵のうち、中世後期に至ると、佐竹本系統とも業兼本系統とも異なる新たな模索を試みた作品が登場する。その代表的な作品として藤房本がある。本研究では、現存する三本をすべて精査し、本作の配列における歌人の描かれ方の特異性を解明し、それが錯簡を生じさせた可能性の高いことを論じた。

具体的には、業兼本系統に見る歌仙歌合形式の左右の向きの規制を脱し、むしろ歌仙を異なる角度から描き分けた新

たな試みに発したもので、装束への関心が、人物像を捉える角度を前後左右及び斜めという全方位に定めるといふ斬新な絵巻であった。カラフルな彩色と相俟って、自在な列座像を連ねるところに、歌仙絵の歴史を新たな段階へ転じた功績が認められ、近世にいたってより自在な絵姿の歌仙絵を登場させる転換点となる作と評価できるのである。

(4) 『時代不同歌合』改編理由と「百人一首絵」との関わり

三十六歌仙絵に与えた影響を考えた「時代不同歌合絵」に関しては、『時代不同歌合』の初撰本から再撰本へ改編される理由につき、図像の解析から新たな解釈を試みた。『時代不同歌合』が後鳥羽院の隠岐での編纂になることを踏まえると、隠岐配流に処された小野篁像の特異な鬱屈の姿勢が自らの配流と連動して強調されすぎることの解消するためと考えられる。その『時代不同歌合』百歌人の配列の特性は、『百人一首』百歌人の配列と原理的に重なる要素を有しており、それを偶然の結果と処理することは困難である。「百人一首」が成立時から歌仙絵を伴っていたか否かについては、説が分かれているが、現存の図像の一致と併せ考えると、当初から絵を伴っていた蓋然性の高さを認めるのが穏当である。

引用文献

- 森暢「三十六歌仙絵」(『歌合絵の研究 歌仙絵』1970年、角川書店)
伊藤敏子「佐竹本三十六歌仙絵巻の構成と成立」(『新修日本絵巻物全集』19、1979年、角川書店)
白畑よし「歌仙絵」(『日本の美術』96、至文堂、1974年)
真保亨「業兼本三十六歌仙絵」(『美術研究』325、1983年9月)
真保亨「後醍醐院本三十六歌仙絵」(『芸術研究報』7、1987年3月)
真保亨「為世本三十六歌仙絵」(『筑波大学芸術学研究誌』3、1986年1月)

- 片桐弥生「歌仙絵の世界 業兼本図様の成立と展開を中心に」(『和歌をひらく 第3巻 和歌の図像学』2006年、岩波書店)
屋名池誠「縦書きの奇妙な世界」(『図書』639、2002年7月)
屋名池誠「書字方向とは」(『図書』640、2002年8月)
米倉迪夫「藤原信実考」(『美術研究』305、1977年3月)
マリベス・グレービル「家業としての絵画制作 信実とその後継者の描いた肖像画」(『美術研究』360、1994年10月、池田忍訳)
若杉準治「似絵」(『日本の美術』469、2005年6月)
村瀬実恵子『TALES OF JAPAN Scrolls and Prints from The New York Public Library』(OXFORD UNIVERSITY PRESS New York 1986)
新藤協三『三十六歌仙叢考』(新典社、2004年)

5. 主な発表論文等

〔論文〕(計3件)

- 寺島恒世、歌仙絵における文字表記 左右の意識と左書きの来歴、日本文学、査読(依頼)有、第63巻第7号、2014、pp.35~44
寺島恒世、変容する三十六歌仙絵 藤房本の特異性、絵が物語る日本 ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて、査読無、三弥井書店、2014、pp.204~217
寺島恒世、歌人の絵姿 歌仙絵の成立と展開、アメリカに渡った物語 絵 絵巻・屏風・絵本、査読無、ベリかん社、2013、pp.142~152

〔学会発表〕(1件)

- 寺島恒世、歌仙絵の変貌と継承、第14回EAJS国際研究集会、2014年8月29日、リュブリャナ大学(スロベニア)

〔招待講演〕(計2件)

- 寺島恒世、後鳥羽院と定家 晩年の

秀歌撰をめぐって、筑波大学日本語日本文学会大会、2012年9月15日、筑波大学（大塚キャンパス）
寺島恒世、『百人一首』と『時代不同歌合』 藤原定家と後鳥羽院、流通経済大学・松戸市公民館連携講座
「和歌の世界に遊ぶ」、2012年7月14日、流通経済大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺島 恒世 (TERASHIMA, Tsuneyo)

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：80143080